様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４４２０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４５８９

研究課題名（和文）中学校アクティブ・ラーニングにおける「対話的実践」の可能性と課題

研究課題名（英文）Possibility and problem of " interactive practice" in active learning of the junior high school

研究代表者
山田　綾（YAMADA, AYA）

四天王寺大学・教育学部・教授

研究者番号：５０１７４７０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，日本の中学校で「主体的・対話的で深い学び」を実現するために，フランスの中学校のフレネ教育実験クラスの実践を検討した。教科の授業は，生徒の話題提供や発表から始まり，生徒が興味・関心や生活経験から出発しつつ，教科内容や背景の学問と出会い，自分の生活世界を問い，文化創造に参加し，社会制作に参加していけるように，教育課程が教師（生徒を含む）の話し合いによりつくられていた。学校を関わりや出会い直しの場ととらえ，授業，TI（個別化学習），アトリエ，クラス会議，成果発表会において生徒同士，生徒と教師・外部の専門家・保護者との対話，文化との対話をつくることが可能であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現在、日本では不登校が増加し続けている。研究成果により，2017年3月告示の学習指導要領おいて求められている「主体的で対話的で深い学び」の実現において、「対話的実践」をどのようにつくりだすことが必要であり，可能であるのか。特に中学校で重視されてきた「系統的な教科学習」を学問的な知に出会い，吟味できる「対話的実践」のあり方と教師の指導のあり方，そしてそのための課題が明らかになった点で，社会的意義は大きいといえる。

研究成果の概要（英文）：　In this study, we examined the practice of Frenet experiment classes in French junior high schools in order to realize "active and deep learning" and "interactive learning" in junior high schools in Japan. Curriculum was developed through discussions among teachers (including students) so that students can start from their interests, question their own life world, understand the subject content and background studies, and participate in cultural creation, and take part in social production. It became clear that it is possible to see the school as a place for re-creating relationships and encounters, and to create dialogues among students, between students and teachers, outside experts, parties and parents in classes, TI (personalized learning), ateliers, class meetings, and presentations of results.

研究分野：教育学

キーワード：フレネ教育　アクティブ・ラーニング　ビヤンヴェイヤンス　社会に開かれた教育課程　生活教育　対話的実践　主体性　カリキュラム・マネジメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では，学習指導要領(2017・2018 年告示)の改訂に向けて，「新しい時代に必要となる資質・能力」を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」とし，各教科の授業をアクティブ・ラーニングの視点で見直し改善することが提起された（中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」2016 年 8 月 26 日)。学習指導要領では，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて各学校で「カリキュラム・マネジメント」を行い「社会に開かれた教育課程」を実現することが求められていた。

一方で，教科の授業を成立させるためには，教室でさまざまな子どもに対して，学習への参加を促し，共同をつくりだす必要が指摘されていた。児童虐待の相談件数や学校における子どものトラブルや不登校の数は増加し続けており（「平成 20 年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する報告書』文部科学省，2009 年)，発達障害への対応も必要であった。子どもは，性別や性的指向，階層，民族，人種，ハンディキャップといった複数のカテゴリーに属する存在としてある。グローバル化は，階層格差・貧困の拡大，消費社会化，価値観の多様化を進行させており，子どもはさまざまな文化状況で成長し，文化形式や作法，つまりハビトウス（ブルデュー）を教室に持ち込んでおり，持ち込む「差異」に注目し，教科の授業を構想することが重要になっていた。その際，欧米のエスノグラフィー研究により明らかにされた子どものとらえ方，即ち子どもは単に社会的構造的な「差異」を映す鏡でなく，「自分たちの複雑な生活世界を認識し，解釈し，交渉しながらアイデンティティを形成する主体」であり，性別や性的指向，階層や人種などの変数は複雑に絡みあい作用している（宮崎あゆみ「ジェンダーと教育のエスノグラフィー」『教育学年報 7 ジェンダーと教育』世織書房，1999 年)。特に，教育のスタンダード化が進行する日本では，主体的で深い学びの過程には対話的実践の検討が不可欠であった。生徒ひとり一人の興味・関心と問題意識から，生活現実や文化的実践に向き合い検討され，知が吟味され共有され深まる過程において他者（仲間や教師，専門家，問題の当事者など）が必要となる。研究代表者・山田綾が行った 2007～2010 年度の小学校のアクション・リサーチや 2011～2014 年度の授業研究では，差異が尊重されない教室で子どもが傷つき，その過去を背負い教室でトラルを繰り返し，一方で差異を尊重し関係性を再構築する取り組みや授業の「対話的実践」によりトラブルが減少し，子どもが平和的に生きられる空間がつくられることが確認できた。

アクティブ・ラーニングの必要は，グローバル経済に対応する新たな知やスキルを持った人材育成から主張されたが，子どもが他者との学びのなかで多様な他者と関係を築いていく「対話的実践」により場が編み直され，新たな文化創造に参加する側面から検討する必要がある。また，それは，コンピテンシー・ベースの教育課程改革において求められたが，他方で 19 世紀末の新教育運動以来，子どもが主体的に学ぶための学校づくりにおいて探求されてきたものでもある。

２．研究の目的

本研究では，日本の中学校でアクティブ・ラーニングを導入する際に，「主体的・対話的で深い学び」のために，「対話的実践」の成立が重要であり，そのための仕組みや課題，条件について明らかにすることを目的とした。特に，中学校では，小学校までの経験を有す生徒の関係性と制度面（教科担任制や受験体制とそのための評価・評定など）において固有の課題が存在する。そこで，ダイナミックにカリキュラム開発と授業改革に取り組む実験校の実践を「対話的実践」を核にして分析し，「主体的・対話的で深い学び」がどのように展開されているのかを明らかにし，カリキュラム・マネジメントとの関係を検討することとした。

３．研究の方法

カリキュラム開発と「伝統的な教育」の転換を試みる中学校実践として，フランスのフレネ実

験クラスを取り上げることにした。研究成果（1）で述べるように，フレネ教育はアメリカやヨーロッパ，日本で実践されてきたが，幼稚園や小学校の実践が中心であった。しかし，2008 年に南仏のラ・シオタで中等教育に実験クラスが設置されたからである。その特徴を明確にするために，生活教育の理念を引き継ぎ，全教科と総合学習で問題解決的学習に取り組む学校や探究に取り組む日本のオルタナティヴ・スクールを視察し，比較検討を行った。なお，フランスの中学校は 4 年間であり，日本の小学校 6 年生から中学校 3 年生までに該当する。

取り上げたのは，ラ・シオタ市で，ジャン・ジョレス・コレージュ(中学)とリュミエール・リセ（高校）で実施されている CLEF(通称クレフ：Collège Lycée Expérimental Freinet :フレネ教育実験中学・高校)である。もう一つは，マルセイユのロンシャン・コレージュ（中学）の実験クラスである。ジャン・ジョレス中学で「地理・歴史」を担当していた教師エレーヌ・ドゥ・カサビアンカ氏が，2017 年にマルセイユの公立中学校であるロンシャン中学に戻り，校長の公認のもとで有志の教師と研究組織をつくり，フレネ実験クラスを立ち上げていたため，視察はジャン・ジョレス中学とロンシャン中学で行った。授業の参観，生徒・教師・保護者・校長などのインタビューや，会議への参加を行った。2018 年度はジャン・ジョレス中学の 10 周年に当たり，記念行事と教師の会議に参加した。記念行事にはフレネ教育を実践・研究している幼稚園・小学校の教師や保護者，関係者が集まり，教育実践の発表やシンポジウムが開催され，幼児期から「自由テクスト」の発表の場がどのように紡がれていくのかを知ることができた。

コロナ禍のため十分な視察はできなかったが，日本のオルタナティヴ・スクールとして，愛知教育大学附属岡崎中学校，きのくに子どもの村小中学校・きのくに国際高等専修学校，自由の森学園中学校・高等学校などを視察した。愛知教育大学附属岡崎中学校では，2019 年度にビデオ録画による授業公開が行われ，その検討を行った。研究資料として，山田が校長として執筆にかかわった愛知教育大学附属岡崎中学校『生き方の探究―「学んだこと」を行動につなげる中で，成長し続ける子ども―』（明治図書，2015）とその後に出版された『独創性を育む―新しい見方で捉え，よりよい考えを生み出す子ども―』（明治図書，2020）などを参照した。

４．研究成果

（1）フランスのフレネ教育実験クラスの開始と経緯

フレネ教育は，セレスタン・フレネ(1986-1966）によりフランスのヴァンスにあるフレネ学校で始められた。それは，教師主導の一斉教授中心の学校教育を転換し，子どもの興味・関心に基づいた自由な表現（「自由テクスト」）を尊重した教育である。公立学校を一つの学級から変えられる教育思想・方法として世界各地の幼稚園や小学校、公立学校でも取り組まれた。2008 年に，「生徒がつまらなさそうに授業を受けていることを変えたい」，「多くの退学者を出している中等教育を変える必要がある」という問題意識から有志の教師が集まり，中等教育の実験クラスが誕生する。CLEF は，2008 年にラ・シオタ市で認可された。CLEF の中学・高校は公立であり，生徒を募集し，学校にフレネ教育を行う特別クラスが各学年 1 クラスずつ設置していった。希望する生徒と保護者はフレネクラスを参観して応募し，応募者の中からさまざまな生徒から構成されるように視学官が設置する委員会で書類審査により決定される。2011 年度に，中学近くのマルタン Maltemps 小学校のフレネ教育の教師数人とのパートナーシップが開始された。

一方，ロンシャン中学では，2017 年に中学 1 年生 8 クラスの 1 つをフレネクラスにすることを決めたが，生徒は募集ではなく，あるクラスで実施された。校長によると，フランスでは教育方法の自由が認められており，フレネ教育の目標とこの中学校の目標が合っているので実験クラスの設置に問題はないとのことであった。エレーヌ氏は，教師の担当時間数増とそれに伴う予算捻出の問題はあるが，教師たちの意志があり，実験クラスの設置を実現させてきたという。生

徒と保護者は，説明会でフレネ教育について説明される。小学校でフレネ教育を経験している生徒もいるが，はじめて経験する生徒が多く，最初は不安であったが，保護者は生徒が取り組み変わっていく姿や成果発表会に参加し不安がなくなったと語り，多くの生徒はクラス会議により自分たちの学校生活と学習を変えていく手応えを感じていると話してくれた。

二つの中学では，地域と課題，設立の経緯やフレネクラスを担当する教師の科目，教育課程・時間割，生徒募集方法などが異なるが，教師たちが試行錯誤しつくりだしている点が重要である。

フレネ実験クラスの設置背景には，フランスでもOECD学習到達度調査（PISA）が始まった2000年以降に義務教育で習得させる「共通基礎」の内容について，論争を伴いながら教育基本法が改正されてきたことがある（2005年フィヨン法の成立，2013年ペイヨン法の成立）。そこには，コンピテンシーの開発だけでなく，知識伝達に偏重した伝統的中等教育により，多くの生徒が16-7歳で学業を諦めてしまう現実に対し，中学校で学びたいと思え，学ぶ意味を実感できる学びを保障するという問題意識もある。具体的にどのように取り組むのかの模索のなかに，フレネクラスの試みがある。そして，フランスの中等教育改革では，子どもをみる際に“bienveillance”（寛大さや好意）というキーワードが注目されてきた点もつけ加えておきたい。

（2）フレネ実験クラスの授業と教育課程の概要

教科担任制で「学問の系統性」が重視される中等教育において，知識伝達に偏重した伝統的教育を生徒の主体的・対話的で深い学びへと転換するには，一人ひとりの生徒の関心・興味や生活経験と，教科内容をどのように位置づけるのか，「系統性」や教師の「教え」のあり方や役割，カリキュラム・マネジメントや評価をどうすればよいのかが問われる。

両中学校のフレネクラスで共通なのは，どの教科の授業も，生徒のその教科に関する話題提供(entretien)や発表から始まることである。授業が始まると，司会（président），タイムキーパー（gardien du temps），発言の順番を割り振る役（donneur de parole）を担う生徒が黒板の前に立つ。書記（secrétaire）が，授業の進行をパソコンで記録する。役割は交代で担われ，授業の場を生徒と教師がつくるしくみがある。書記の記録は，不十分な点や必要なことを教師が補い，次の授業で生徒に配布され，読まれる。これは，生徒の発表や話し合いの記録に，教師が教科教育の内容に発展するように必要な資料を補ったり構成し直したりした，いわば生徒と教師が授業でつくりだしていく教材プリント＝もう一つの教科書「自由テクスト」である。以下，これを可能にしていくしくみをジャン・ジョレス中学を中心にみていくことにする。

授業では，生徒の話題提供や発表がいろいろな方法でなされるが，発表中に教室内の他の生徒たちは黙ったまま挙手し，質問や意見の意思表示をしていく。発表中に係の生徒は手を上げた生徒の名前を順番に黒板に書き，発表者の話が終わると，司会の生徒が黒板に書かれた名前の順に生徒を指名し，順番に発言させる。1人の生徒の発言が終わると，その生徒の黒板の名前が消される。質問・感想・意見が出され，発表者がそれに応答する。つまり，応答関係にひらかれている。発表の場合，教師が必要な資料（歴史地理ではできるだけ第一次資料）を提示し，生徒の発表が例えば史実であるかどうかや，事実の解釈について研究者の見解はどうかが投げかけられ，生徒はそれらに出会い吟味できるように展開される。エレーヌによれば，中学のナショナル・カリキュラムで扱うとされている内容は、4年間でほぼ扱うことができるという。なお、このスタイルはナショナル・カリキュラムが大綱的で4年間で習得することになっており、かつ高校受験がなく、生徒は最終学年で全国試験（Brevet）に合格し中学修了証書を獲得するというフランスのしくみのもとで可能だといえる。フレネクラスでは、全国試験がある学年以外で試験や点数による評価は行わず、学習計画の達成や、プロジェクトの内容、発表作品などの取り組みについて記述する形で、教師、生徒、保護者による評価が行われる。

加えて,生徒の話題提供や発表から授業を進めることを可能にしているのは,教育課程である。教科の授業以外に,ＴＩ（テーイー：Travail Individualisé 個別化学習),アトリエ（Atelier),クラス会議（Conseil de Coopé）があり，成果発表会 expositions réussites が開催される。

ジャン・ジョルス中学では，ＴＩは週に5時間，アトリエは月曜日の午後に3時間，クラス会議は毎週金曜に1時間ある。通常の教科授業の時間から，ＴＩ，アトリエの時間が捻出される。生徒は，TI の時間やアトリエの時間に，教科の発表の準備をすることができる。ＴＩは，自分で3週間の学習計画を立て，自分の発表や話題提供，教科担当教師に要求される練習問題のようなものに取り組む。異学年の生徒によりクラスが編成され，チューター役の教師や生徒同士で相談したり教え合ったりする。必要な時は,記載して教科の教師のところや図書館に行ってもよい。アトリエには，いろいろな教科があり，クラス会議で生徒の希望が募られ，調整される。歴史・地理はエレーヌ氏が担当し，そこで取り組んだ作品が地理・歴史の教科の授業で発表され，質問され，意見が出され，吟味され，さらにエレーヌ氏により，教科内容とされている史実や解釈などに出会い検討され，調査方法や検討の仕方についても意見交流がなされる。それを経て生徒は自分の発表内容を完成させていく。それらは生徒たちの同意を得て,成果発表会で発表されたり,冊子に掲載されたりする。フレネクラス独自の教科として情報科学が設定されており，生徒はプログレマティーク（問題化）に取り組み，現実の批判的検討が行われることも重要である。クラス会議では，生徒が司会や書記を担い，投書箱に出された意見，例えば学級の改善すべき点や,成果発表会の企画など授業に関わることも話し合われ，アトリエの参加人数調整も行われる。

つまり，フレネクラスでは，生徒は，自らの興味・関心・疑問や生活経験から出発し，教科内容やその背景にある学問・研究者と出会い，自分たちの生活世界を問いながら，文化の創造に参加し，社会制作に参加していけるように，授業や教育課程が教師たち（生徒を含む）の話し合いとカリキュラム開発により日々つくられている。そして，学校・教室をかかわりや出会い/出会い直しの場としてとらえ，授業，TI，アトリエ，クラス会議，成果発表会のいずれにおいても，生徒同士，生徒と教師・外部の専門家や当事者・保護者との対話，生徒と文化との対話（＝生活世界と文化・学問の往還）が重視され，その実現のために教師同士が対話している。

(3)「対話的実践」の可能性と課題

それが成り立つのは，フレネ教育が「自由テクスト」をエスプリとして重視しているからである。そこには，①応答関係への自由，②プロセスとしての自由，③テクストになる自由，④出現の自由，⑤かかわりや場を編み直す自由があると岩川直樹は指摘する（岩川直樹[＜声 voice＞を網み合わせる場づくり」『フレネ教育研究会会報』No.74,2005，pp.2-19)。特に，中学では，各教科が背景としている学問の作法や概念・法則などの捉え方にアプローチする自由が保障され，教師の役割や授業の記録，生徒の成果発表会などがつくられている。岩川は，学校・教室を声が響き合う場にするために，安心して差し出せる空間，一人称を尊重する文化，応答関係をつくり，その上に吟味しあえる関係をつくりだしていくことが重要であり，また自分とは異なる他者の声にふれ，自分が揺さぶられる経験をもつことや猥雑さの許容，例えば弱さや情けなさなど生きていればもつさまざまなものが許される場であることが重要であると指摘する。コロナ禍と急速なデジタル化の推進により，子どもたちは関わりや出会いを制限され，まず子どもたちの関わりや出会いつくることから始めないと授業が成立しない状況が各地で報告され，不登校数が増加し続けており，学校・教室を声が響き合う場に編み直していくことは，日本の喫緊の課題である。それには，授業の様式や時間割・カリキュラムの開発，評価方法（受験と連動しない）において，フランスのように教師の専門性と自律性，裁量が認められること，かつフランスでも問題になっていた教育予算と教師の労働時間への手配が課題であり，必要であるといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山田　綾	４．巻 217
２．論文標題 生きることにつながる学びと参加―差異と複数生にひらく討議、対話・討論	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『高校生活指導』誌	６．最初と最後の頁 102－109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田　綾	４．巻 765
２．論文標題 「性の多様性」と生活指導―「討議づくり」の可能性―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『生活指導』	６．最初と最後の頁 60－67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瓦林亜希子	４．巻 下巻ー幼児教育の現代史ー
２．論文標題 1940年代前後のフランスとフレネ教育運動	５．発行年 2022年
３．雑誌名 幼児教育史学会監修/小玉亮子・一見真理子編集『幼児教育史研究の新地平』萌文書林	６．最初と最後の頁 127-131.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瓦林亜希子	４．巻 第8集
２．論文標題 子どもの自由な自己表現を尊重する生活綴方の歴史	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『都留文科大学教職センター紀要』	６．最初と最後の頁 104-109.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 瓦林亜希子	4．巻 フレネ教育研究会会報118号
2．論文標題 特別講演「フランス・ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践」日本語原稿	5．発行年 2022年
3．雑誌名 フレネ教育研究会会報	6．最初と最後の頁 25-31.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 瓦林亜希子	4．巻 第6号（第59回夏の全国集会号）
2．論文標題 実践報告「なぜ森のない浦安市で森のようちえんを始めたのか」「ヨーロッパ視察から学んだ実践ー箕面こどもの森学園の変容」記録・感想	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フレネ教育研究会通信	6．最初と最後の頁 p.4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 瓦林亜希子	4．巻 第31号
2．論文標題 日仏の高等学校における教育課程改革	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フランス教育学会紀要	6．最初と最後の頁 pp.67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 瓦林亜希子	4．巻 5
2．論文標題 「イエナプランとフレネ教育」記録・感想	5．発行年 2018年
3．雑誌名 フレネ教育研究会通信5（第58回夏の全国集会号）	6．最初と最後の頁 pp.5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Henri Louis GO, Akiko KAWARABAYASHI	4．巻 2018-2019
2．論文標題 La valeur de bienveillance en éducation. Une coopération France-Japon en "Pédagogie Freinet" （教育における「子どもをありのままに受け入れる」ことの意義ーフレネ教育における日仏間の協働的実践）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Les valeurs en éducation Transmission, conservation, novation [Laboratoire LISEC - Université de Lorraine](仏ロレーヌ大学LISEC研究所紀要ー”教育における価値体系：発信と受信、そして革新”）	6．最初と最後の頁 pp.143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 瓦林亜希子	4．巻 第44号
2．論文標題 すべての子どもを受け入れる教育方法の日仏における歴史と思想	5．発行年 2018年
3．雑誌名 北陸大学紀要	6．最初と最後の頁 16-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 瓦林亜希子・田中昌弥	4．巻 2018年
2．論文標題 日本における子ども中心主義から生まれた教育方法とカリキュラムの理念に関する	5．発行年 2018年
3．雑誌名 都留文科大学教職支援センター年報	6．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山田　綾
2．発表標題 「評価」の観点から生活指導実践の価値を問う－インターセクショナルに現実を共に読むことから－
3．学会等名 日本生活指導学会 第40回大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 Akiko KAWARABAYASHI（瓦林亜希子）
２．発表標題 CONFERENCE :LA PERMANANCE DU COURANT PEDAGOGIQUE DE L' "ECRITURE DE LA VIE " DANS LES ECOLES JAOINAISES APRES-GUERRE(講演：戦後の教育改革と日本の学校における生活表現を大事にする教育実践の意義)
３．学会等名 LES JEUDIS DU JAPON, CYCLE DE CONFERENCES ORGANISE PAR L'INSTITUT FRANÇAIS DE RECHERCHE SUR L'ASIE DE L'EST ANTENNE DE TOULOUSE（フランス東アジア研究所トゥールーズ支部）（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 瓦林亜希子
２．発表標題 ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性ー自然観、カリキュラム、教育運動の観点から
３．学会等名 日本フレネ教育研究会　主催　フレネ教育入門講座　第３回発展編 I（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	瓦林　亜希子 (KAWARABAYASHI Akiko) (10780249)	都留文科大学・教養学部・准教授 (23501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関